

キャラクター名 プレイヤー名

シンドローム	ウロボロス		ワークス	医者	カヴァー	医者
	ウロボロス					
オプション			年齢	性別		
覚醒	償い	衝動	解放	初期侵食率	36	%
出自	安定した家庭	経験	喪失	邂逅	いいひと	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	28
肉体	2	0	0			2	行動値	8
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	8
精神	4	0	0			4	戦闘移動	13
社会	0	1	0			1	全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	6		交渉		
回避			知覚			意志	1		調達	1	
運転:			芸術:			知識:医学	4		情報:学問	1	
運転:			芸術:			知識:レネゲイド	1		情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
	RC	14r+16				
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品		合計装甲:	0	合計回避:	0
メモリー		ロイス			
		対象	感情(pos)	感情(neg)	タイムス消費
		奇妙な隣人	P 親近感	N 無関心	
		四峯 安次	P 同情	N 不安	
		ホワイトハンド	P 誠意	N 敵愾心	
		あの時のチビ助	P 遺志	N 食傷	
		藤沢さち	P 懐旧	N 不安	
		ルシア	P 感服	N 隔意	
			P	N	
		最大財産P:	4	残り財産P:	

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
螺旋の悪魔	1	3	せ	しき	じ	じ		
効果:	暴走,Ro間攻撃+Lv*3							
背徳の理	5	3	お	しき	じ	じ		
効果:	1点与ダメ時Sc間ダイス+Lv*2							
極限暴走	1	3	じ	しき	じ	じ		
効果:	暴走時1点与ダメの条件を満たす							
浄玻璃の鏡	1	1	り	しき	じ	た		
効果:	ドッジ							
飢えし影	1	1	め	しか	た	た		
効果:	攻撃+Lv+2							
灰:ヴァリアブルマシン	1	6+2	ま	しき	じ	じ	120	
効果:								
O:レジェンド	5	2	ま	しき	じ	じ		
効果:	Sc間精神達成値+Lv*2							
コンセ	2	2	め			た		
効果:	C-Lv							
リフレ	2	2	り	しき	じ	た		
効果:	C-Lv							
原赤:憎悪の炎	1	+1	め			た		
効果:	対象変更,1/Sc							
白:時間凍結	1	+2						
効果:								
シャドウダイバー	★	2						
効果:	他者の感情を読み取る,対抗意思							
EF:プロファイリング	★							
効果:	わずかな証拠や情報から推理する							

救命医だった。研究がしたいならとりあえず医者をしと。仕方がないと言う連中もいるけど、私はそうは思えなかった。家に帰るのすらサボって大学や病院に引きこもっていたせいかもしれない。だったら救命に詰めとけと言われて、あまり考えずに従った。だから大事なところに気が付かない。バカがいた。色とりどりの死に体で唐突に現れる患者達を必死になって助けようとするアイツは、明らかな過労の様子を見せながらも無茶を止めず医療事故を起こしてはなくなった。しょうもないヤツがいたもんだ。そう囁く私を、空っ風が吹いた。久しぶりに家に帰った私は洗濯機が回り終わるまでの暇つぶしに散歩に出た。夜勤明けにはまぶしい日光に細められていた私の眼は、唐突に開かれた。交通事故の現場。意識を失って倒れる男の子を心配するように、上半身だけのアイツは手を伸ばしていた。なんで、どうして、もう医者でもないのに。アイツの疲れた目を見てると思い出した。悲しみを無くすために医者を目指していた私の目を。鏡を見ると虚しくなった。名前も顔も知らない誰かより研究の楽しさに憑かれた私を見て。見ないふりをしてきた後悔に押しつぶされるように、私は膝をついた。

「おい、おいってば」
まるで棺桶のようにかび臭い地獄にキーボードの音が鳴る。
「聞こえてるだろ、どんだけ無視する気だよ！もう半年は経つんだぞ！」
そろそろ精神科にお世話になるか。乾いたコーヒーがこぼりつくカップに手を伸ばすと、その影が浮き上がった。
「はあ！？」
人間サイズまで膨れ上がったその影はクマの濃くなった私の顔を全力で殴りつけた。書類と脱ぎ捨てた衣服の山に背中をぶつけた私を見下ろすように立った影は膝をつき、手を伸ばす。
「お前のことは見てきた。ずっと悲しみを抱えてきたことも、ずっと自分の心を押し込めてきたことも」
「だから教えてやる。その衝動を飼いならす手段を。お前自身が悲しみをブチ壊す手段を」